

# まちとつながる「余白」のある住宅

—横浜市羽沢常盤台地区を対象として—



神奈川大学 濱 大智

## 背景

戦後の住宅政策では住宅を効率よく増やすために一般的な核家族をもとにプライバシー性の高い住宅が作られた。その住宅のつくり方は今も続いており、住宅地には似通った新築が多く建てられている。しかし、今日の日本では核家族が居住の単位ではなくなってきており、高齢者や一人親世帯、障害者といった社会的弱者と呼ばれる人たちだけで住まうことも多い。彼らにとって住宅は関わる場所ともなにくく、社会的孤立を強めている。



多様な人たちが同じまちに住む現代だからこそ、**人々がお互いに関わるような場所がしみ出す住宅地**が必要であり、郊外住宅地における更新法が求められる。

## 目的



台湾やベトナムをはじめとするアジアの国々では人々の関わりやその跡がまちの風景となっている。団地の廊下の一角や建物との細い路地が住民同士の関わる居場所となっている。このような建築内外に存在する居場所となり得る空気を「余白」と呼ぶ。余白は住居とつながることで空間を広くしたり、違う機能を与えたりと様々な使い方が見られる。そうした余白に人々のふるまいの蓄積や居場所が残る続け、魅力的な風景となっている。

本研究では余白を用いて、小さく居場所をつくりながら、既存のまち並みを残していく住宅地の更新法を提案する。そこで建築内外に存在する余白に着目し、余白に関する考察から、住宅が他者と関わる場所となるための仮説を導く。

## 余白とは

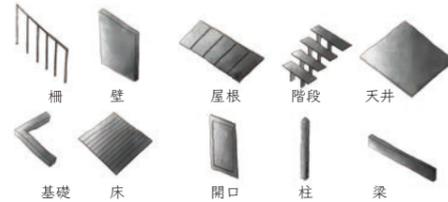
余白が実際に他者との関わり場となっている事例をもとに、建築（コア）と余白（オープンスペース）の関係性を考察し、居場所となる余白を形作るスポットやボーダーが何によって構成されているのかを明らかにする。

ボーダーの構成要素：**マテリアル**

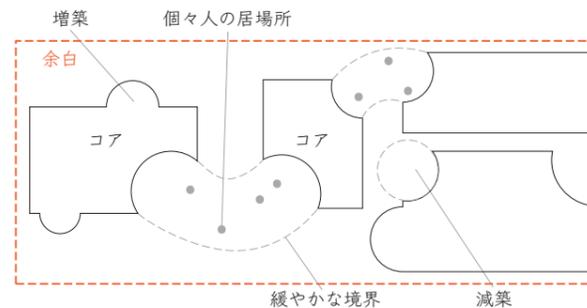
透過性が高く軽い ← 透過性が低く重い



ボーダーの構成要素：**エレメント**



余白の可能性



スポットの構成要素：**オブジェクト**



個々人の居場所となりやすい ← 集団としての居場所となりやすい

スポットの構成要素：**アイテム**



余白は人々の関わりを許容する場所であり、私的空間や公的空間となる可変性がある。

しかし、そうした余白が計画的に配置されないために、家族構成や身体の変化に対応できず、住宅内外に生まれる余白がコミュニティの形成場所となることは少ない。全てを内包する従来の住宅に対して余白をつくることで、人と関わることを容易にし、個々人のライフスタイルの変化に応じて変化する柔軟な住宅とする。

つまり、余白とは住宅地において単なる隙間や空地ではなく、**居場所を生み出す場であり、居場所と居場所をつなぐ空間なのである。**

## 調査

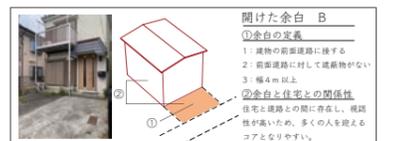
対象地域：神奈川県横浜市羽沢常盤台地区

1970年頃に市街化区域となった畑や樹林地は新興住宅地となり、2019年には駅前の再開発により家族層が増加傾向にある。横浜国立大学や専門学校があり、学生の多く住むまちでもある。その一方で、1970年頃に建てられた住宅の大半が高齢化により空き家として残される、もしくは解体され、新築住宅へと建て替えられている。そのため、元のまち並みは崩され、住宅地における新陳代謝を加速させている。駅前の再開発によりまちの機能の集中化が進み、住宅地にあった商店街がなくなった影響で住民の居場所がまちから駅前へと変わり、住宅地の在り方が問われている。



まちの余白

まちに見られる余白の特徴から余白をそれぞれ定義し、住宅との関係性を考察することで余白を計画的に構築する手がかりとする。



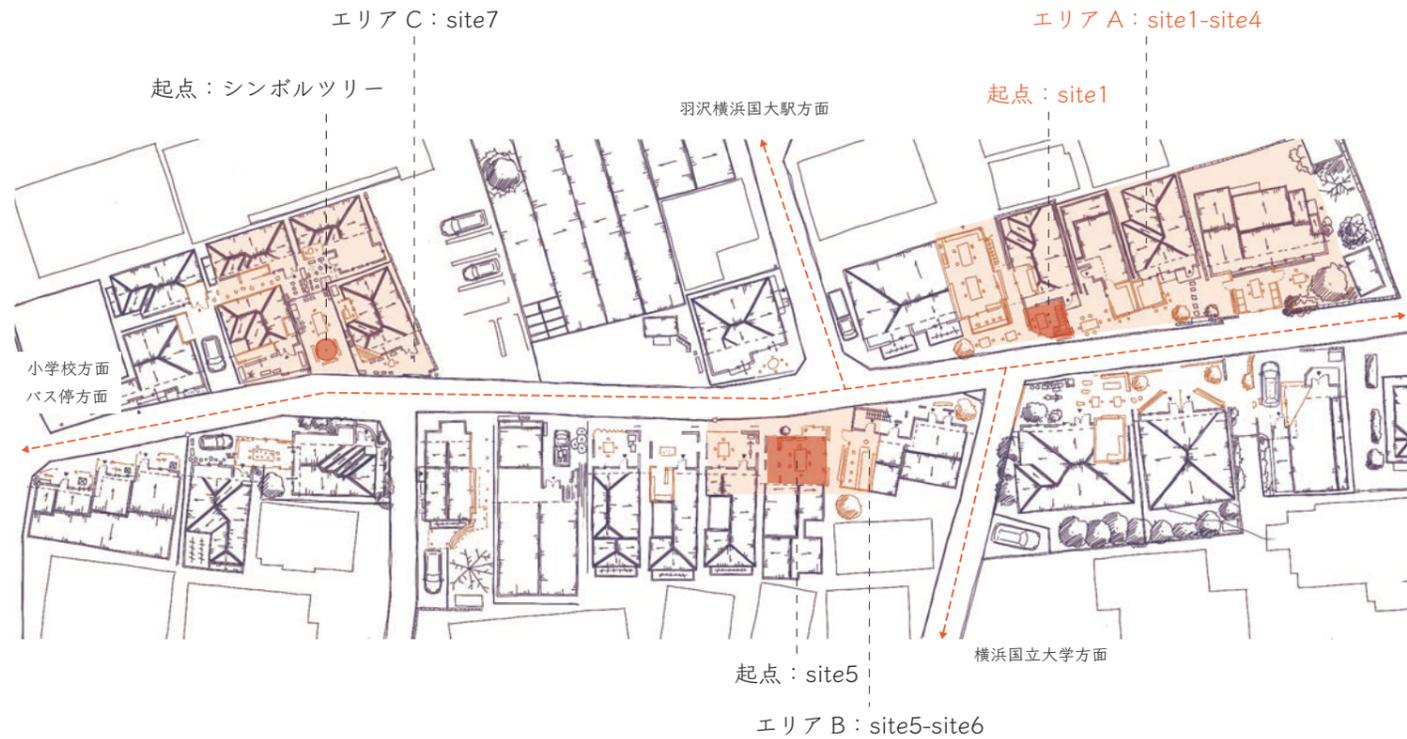
まちの出来事

まちで起こる出来事を収集し、起こりやすい場所や日時を把握することでその出来事に合わせた余白をつくることができ、自然と関わりを生まれる。



# 計画概要

## 計画エリア



## 設計手法

### ■つくる余白

#### ー大規模な改修ー

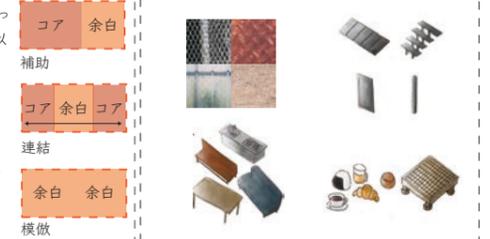
余白をつくるにあたって周囲の道路との関係や将来的な家族構成の変化を想定し、大規模改修を既存の住宅に対して行う。この改修はその後何十年と家族や他者との関係性から変化しながら、住宅地にも影響を与えるコアとしての機能を兼ね備える。既存の木の軸組を一部残すことで変化の過程をハードとして表し、既存の面影を継承することにつながる。

### ■生かす余白

#### ー小規模な改修ー

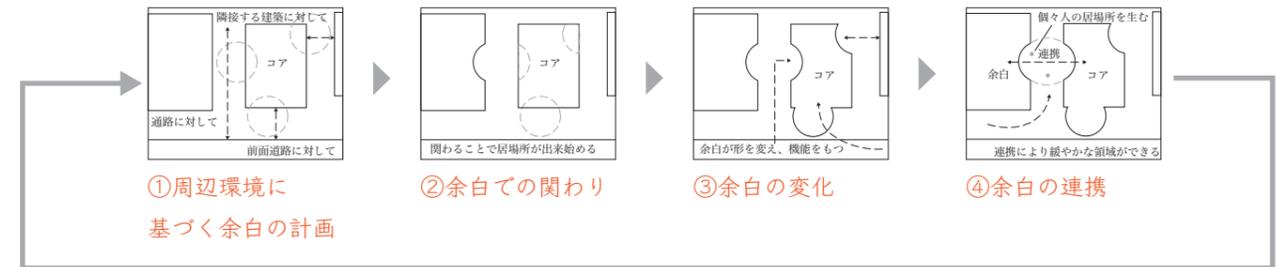
居場所の分析をもとにコアと連携し、周辺の余白となっている場所を居場所とするために、小規模改修 (10㎡以下) によって、余白がコアを補助する「補助」と余白がコアとコアを結ぶ「連結」が余白を住宅地におけるオープンスペースや機能として生かす。連携によってそこには一定の領域が築かれ、個々人の居場所もつくり出す。また、余白の居場所化から影響を受け住民が自主的に余白を居場所化する「模倣」も加え、住民の主体的な余白の生かし方に期待することができる。

### ■マテリアル、エレメント、オブジェクト、アイテムの検討



## 更新手法

仮説をもとに住宅地における余白が連鎖的に居場所として変化していくために、①調査を行い余白の計画②余白での関わり③余白の変化④余白の連携、という4つの過程を踏む。この4つの過程を経ていくことで住宅単体での更新ではなく、住宅地としての更新が可能であり、まちの更新にもつながる。

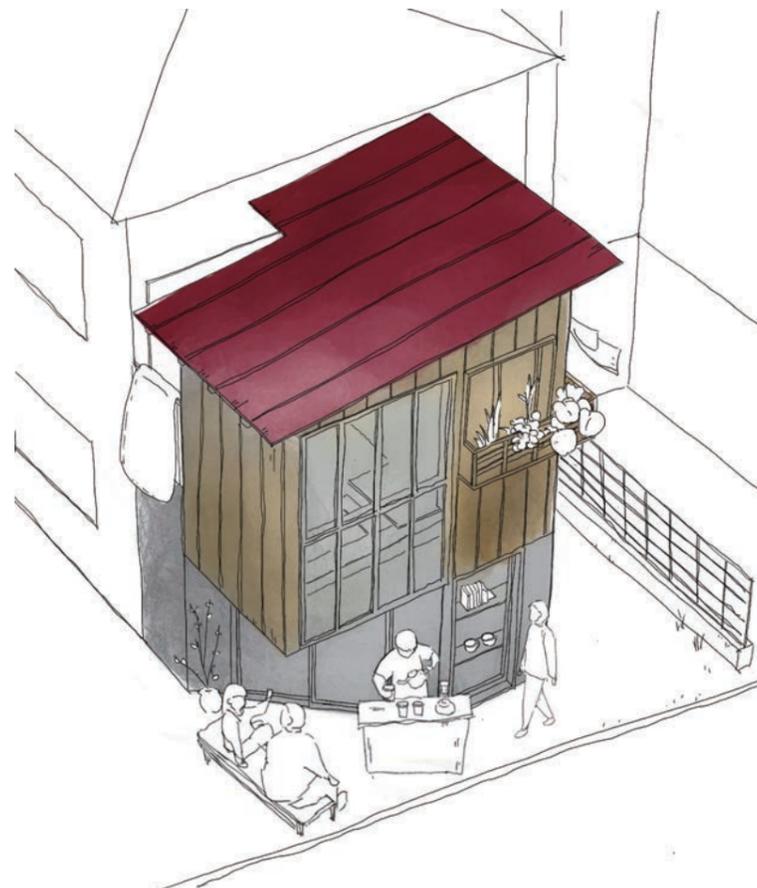


余白が連鎖し、まちに広がっていく

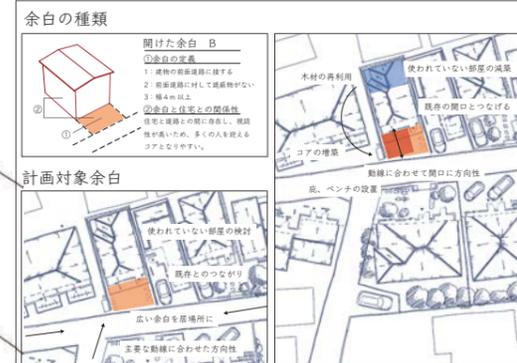
## 設計

### エリア A site1

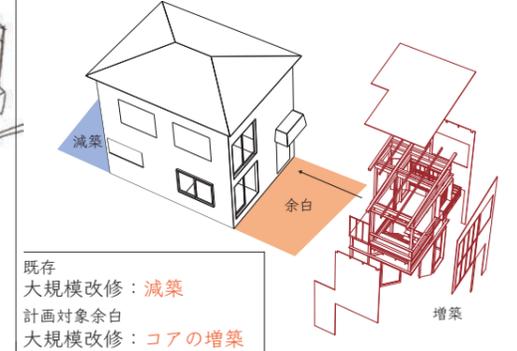
#### 減築+増築パターン



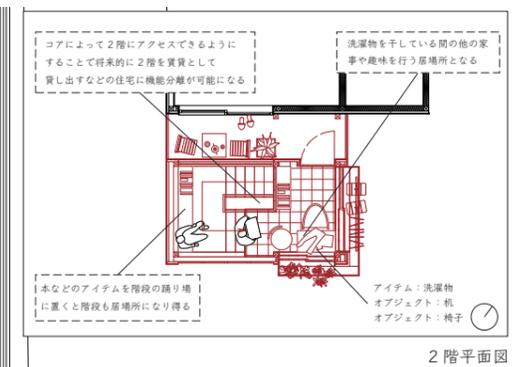
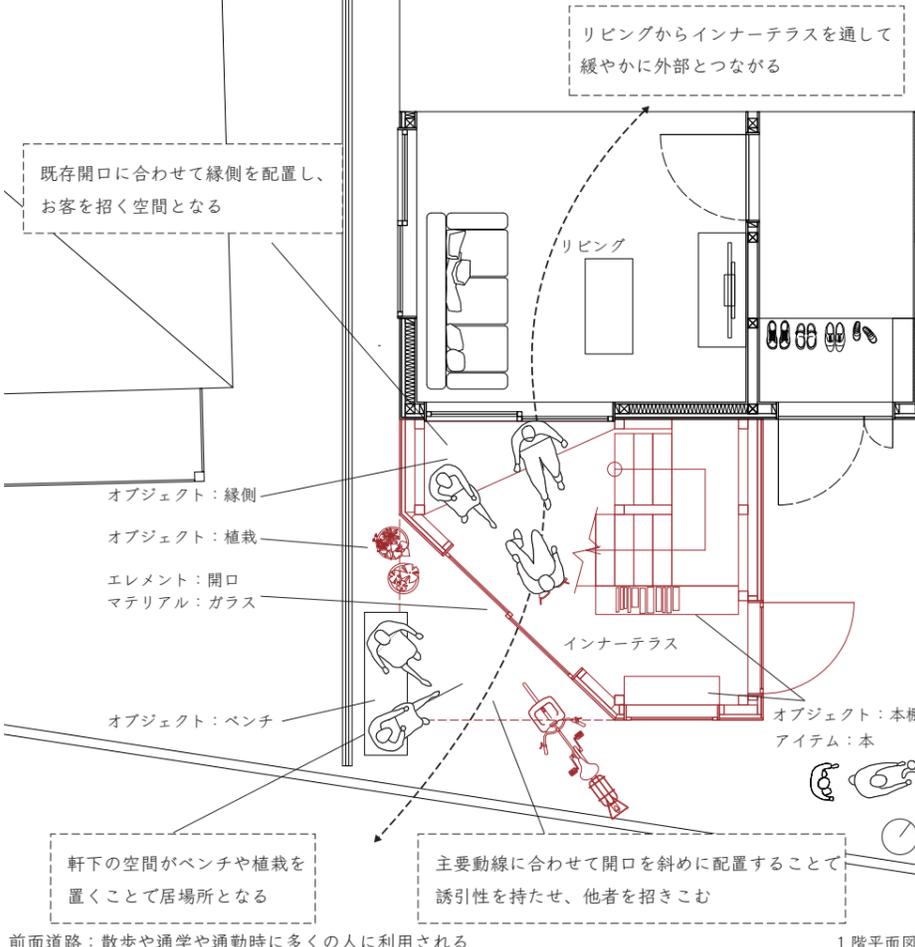
### ①周辺環境に基づく余白の計画



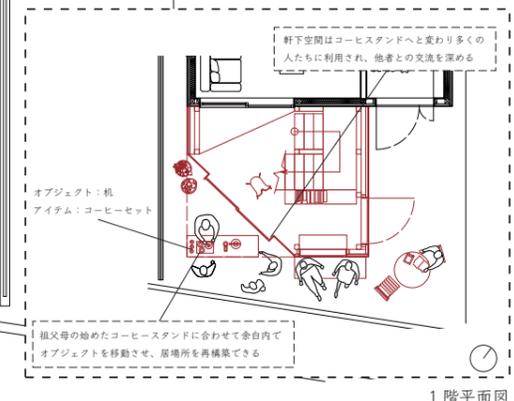
### 設計手法の決定



### ②余白での関わり



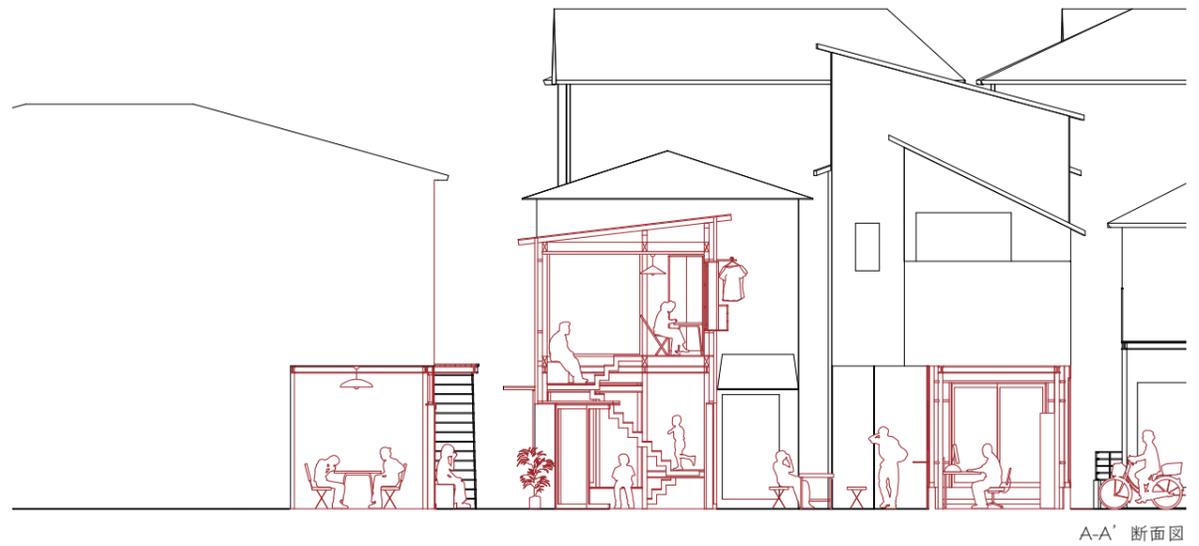
### ③余白の変化



前面道路：散歩や通学や通勤時に多くの人に利用される

1階平面図

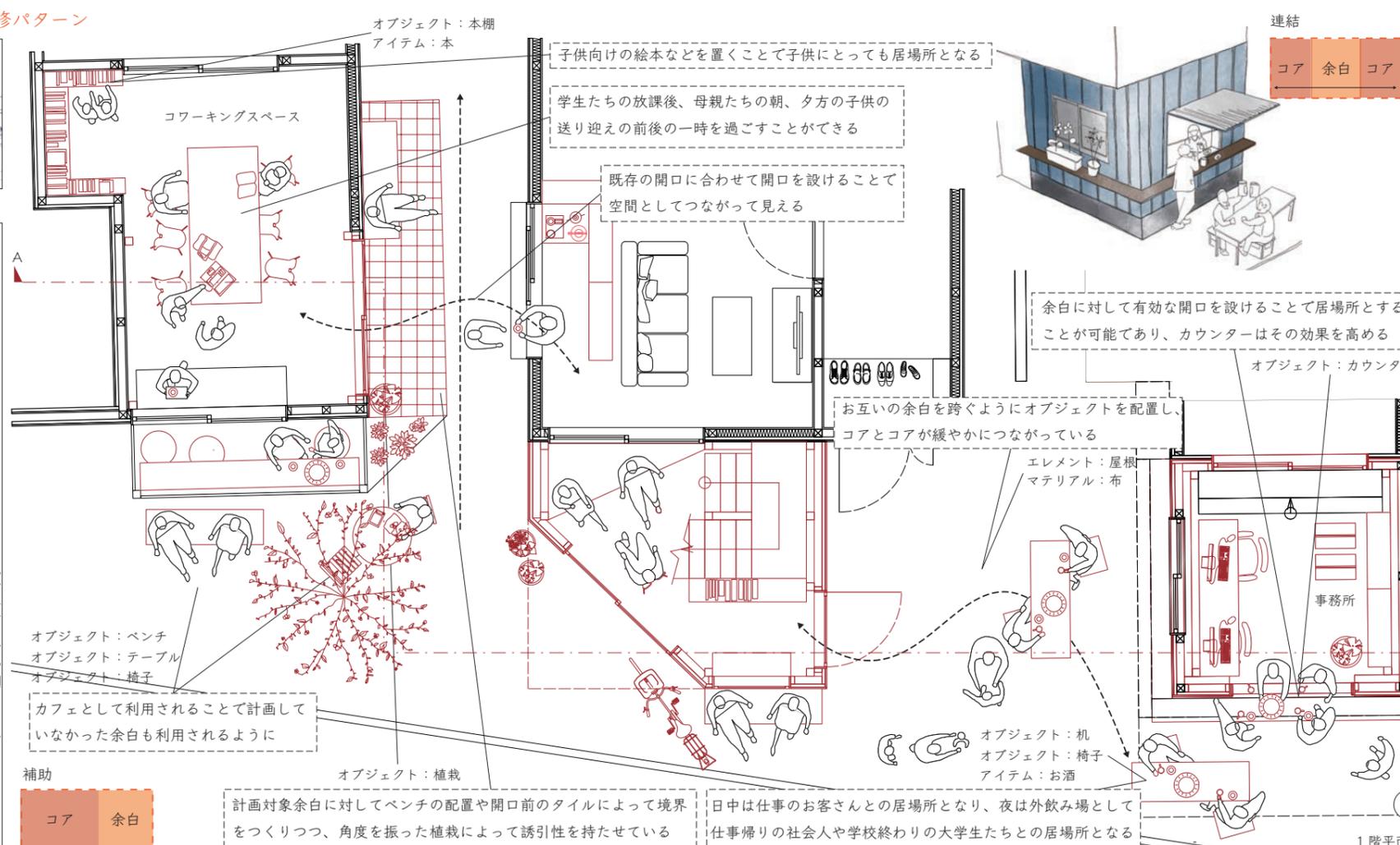
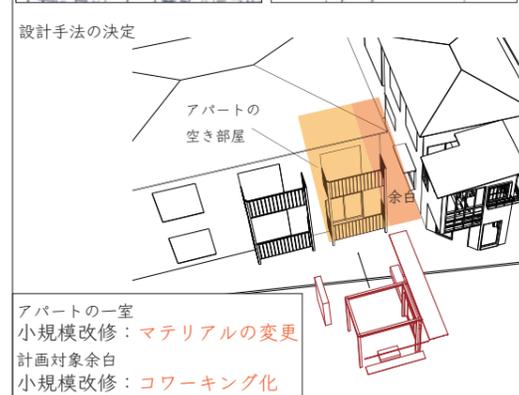
1階平面図



④余白の連携 エリア A site2 改修パターン



①周辺環境に基づく余白の計画

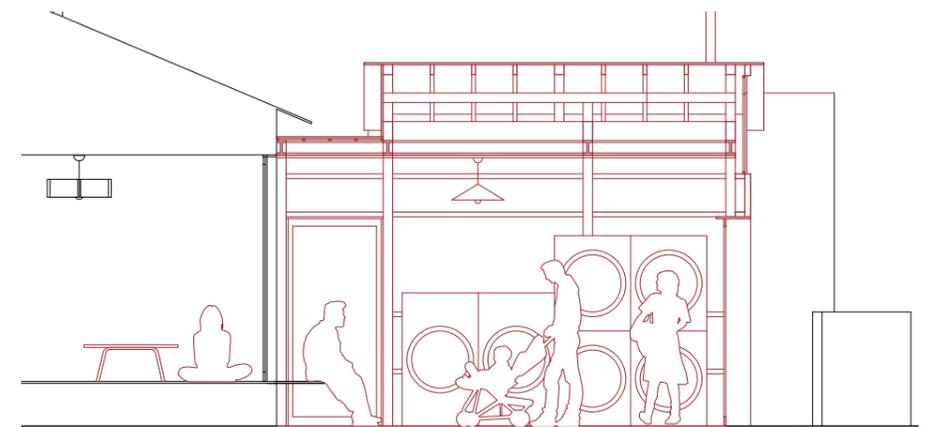


エリア A site3 改修パターン



①周辺環境に基づく余白の計画





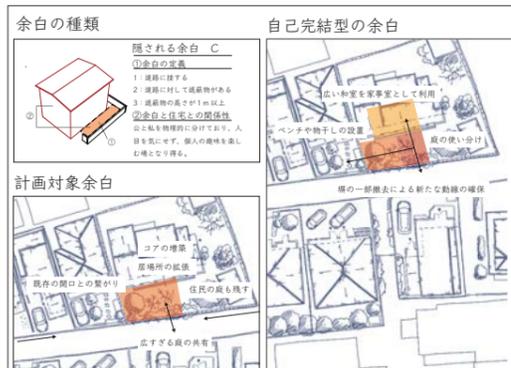
A-A' 断面図

エリア A site4

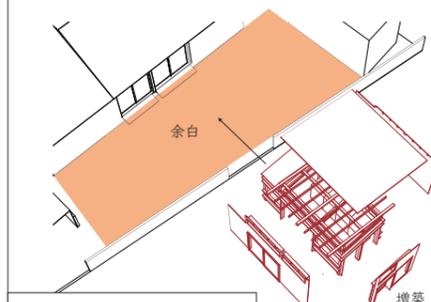
増築パターン



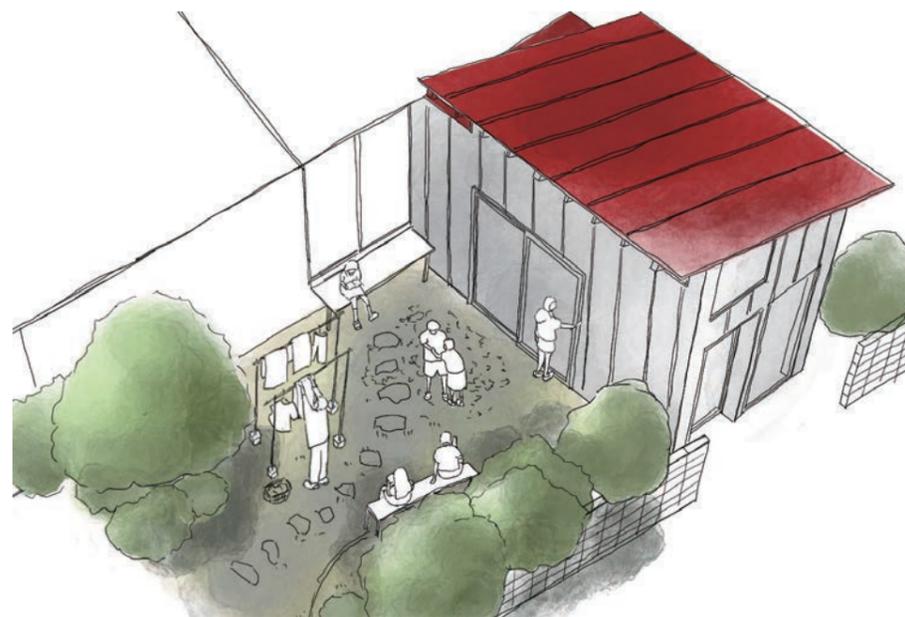
①周辺環境に基づく余白の計画



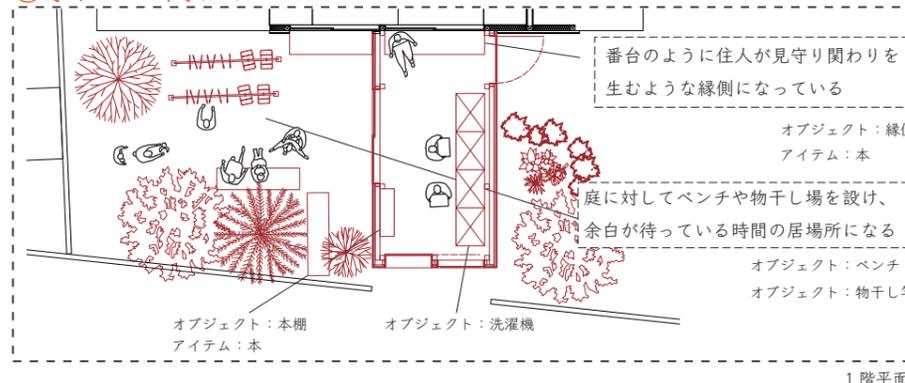
設計手法の決定



計画対象余白  
大規模改修: コアの増築

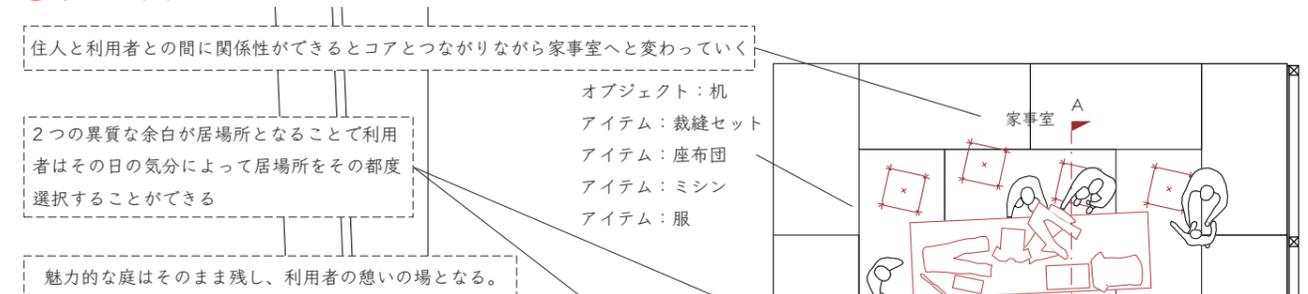


②余白での関わり

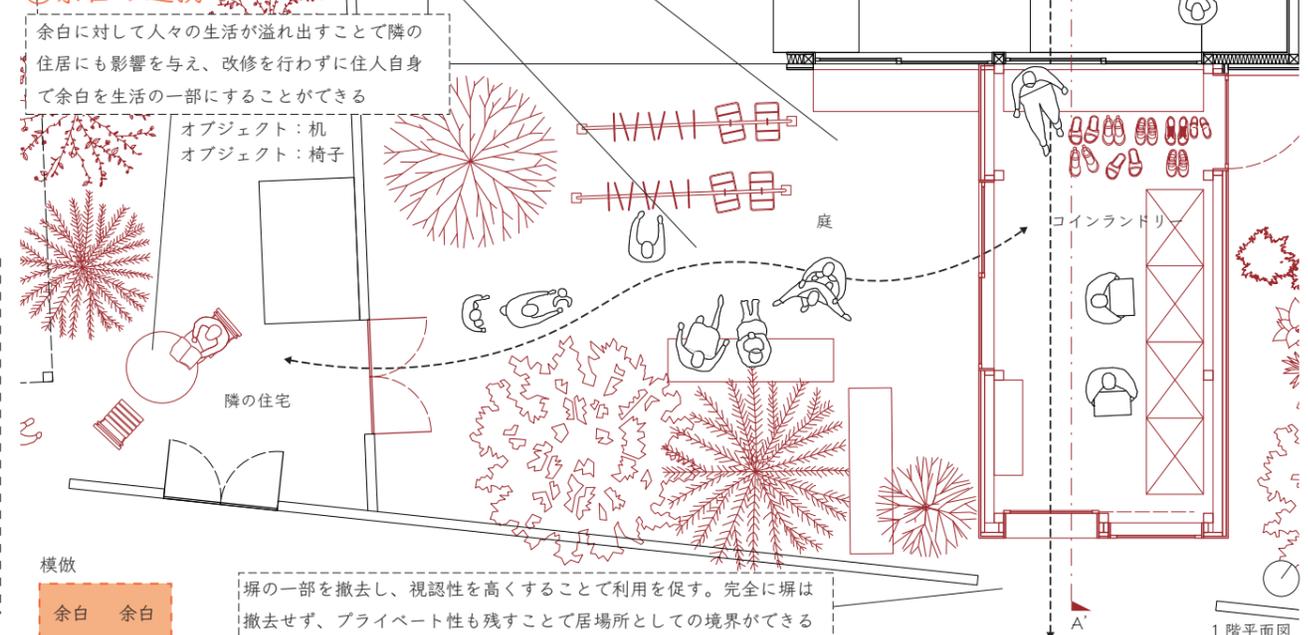


1階平面図

③余白の変化



④余白の連携



1階平面図